

福島大教育 栗原 澄子

1. 「日本に於ける衣服の流れ」をまとめる基礎的研究である。鎌倉鶴岡八幡宮の装束につづいて、先に熊野速玉大社の縁起と、ここの国宝の「保号」の薄衣と「呂号」の袴の形態、色相、染織、縫い糸についての調査報告をしたが、今回は縫い方について報告する。

2. 「保号」の薄衣と「呂号」の袴は破損が甚だしいので縫い方のすべては明らかでないが、当時のおもかげを残しているところは出来るだけ正確に調査し、縫い方順序や欠損の部分は、鶴岡八幡宮の装束の時と同様に宮内庁装束調進の高田義男氏、黒住陽太郎氏の御教示を参考にして、私が遺品のさまを $\frac{1}{2}$ 大に復原した時のようすから推して縫い方順序並びに縫い方を述べる。

3. この神社の「薄衣」(うすぎぬ)と呼ばれているものは単衣が多いが、「保号」の薄衣は「袿」様である。縫い代は四ッ縫い・三ッ縫いを用いて、表地、裏地の間に納め、袖にふりがある点は、鎌倉時代の製作と推定される鎌倉鶴岡八幡宮の「袿」とは異なる。袴はねじまちと称する形態のもので、裏は引き返しである。笹襷は耳のまま用いられ、腰板は左右不均衡で、紐の付け方なども現代のねじまちの袴の手法とは非常に異なるが、製作当時からこのようであったか、今後の多くの遺品調査により明らかになるとと思われる。